

令和 5 年 5 月 15 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13162

研究課題名（和文）占領期の日本本土における駐留米軍のスポーツ活動と日本のスポーツ活動への影響

研究課題名（英文）The effects of sports activities played by the U.S. forces during the allied occupation on Japanese sports

研究代表者

熊澤 拓也（Kumazawa, Takuya）

東洋大学・ライフデザイン学部・講師

研究者番号：70793818

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：第1に、駐留米軍は非常に数多くのスポーツを、独自のスポーツ施設内のみならず、接収した日本のスポーツ施設においても、様々な目的（競技、訓練、余暇、性病予防など）で行なっていたという事である。

第2に、基地内部の大会に始まり、勝ち進めば最後は日本本土代表として他国に駐留する米軍チームと対戦する国際試合まで、一連のトーナメント戦やリーグ戦が組まれており、国際米軍スポーツ界とも言うべき体系だった制度・仕組みが形成されていたという事である。

第3に、多種多様で活発な駐留米軍のスポーツ活動は、用具・施設・指導者等だけでなく、日本の人々が新たなスポーツを初めて体験・観戦する機会ももたらしたという事である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまでのスポーツの人文社会科学研究における「占領期の欠落・駐留米軍の不在」という研究史上の穴を埋めると同時に、従来の占領期研究におけるスポーツという分析対象の欠落も埋める役割を果たす。

また、軍事史研究では、軍隊と社会・住民の関係を問う「広義の」軍事史といった新たな研究潮流が出始めており、その一分野として海外では軍隊スポーツ研究が盛んになりつつあるが、日本占領期の駐留米軍を対象とした研究は国内外問わず管見の限り皆無である。この点で本研究は軍隊スポーツ研究という分野の知見を深める点でも有意義である。

研究成果の概要（英文）：First, U.S. forces stationed in Japan played a large number of sports for various purposes (competition, training, leisure, prevention of venereal diseases, etc.) not only in their own sports facilities but also in Japanese sports facilities that had been confiscated.

Second, a series of tournaments and leagues were organized, starting with internal base tournaments and culminating in international matches against U.S. military teams stationed in other countries as representatives of the Japanese mainland, forming a system and structure that could be called the international U.S. military sports community.

Third, the diverse and active sports activities of the U.S. military forces stationed in Japan provided not only equipment, facilities, and coaches, but also opportunities for Japanese people to experience and watch new sports for the first time.

研究分野：スポーツ史、スポーツ社会学、スポーツ文化論

キーワード：占領期 駐留米軍 米軍基地 基地文化 アメリカンフットボール 星条旗新聞

## 1. 研究開始当初の背景

占領期は、日本が国家としての主権を制限され、間接的ながら他国による統治を受けた唯一の時代である。このような特殊な状況下で、日本が統治者である連合国（主に米国）の影響を受けたことは想像に難くない。実際、占領期研究では当時の政治・経済・社会・文化など様々な面で日本への米国の影響が明らかにされており、近年では特に日本の生活文化のどの分野で、どのような社会層に、米国の何がどう影響したかについて、詳細な検討が加えられるようになった。

だが、スポーツの人文社会科学的研究では、この問いが十分に深められてこなかった。これまで占領期に言及した研究は以下の2つに大別できるが、いずれも限界を抱えている。

(1) 日本スポーツ界の戦後復興過程研究：戦前・戦中期を論じた延長でエピログ的に戦後占領期に言及するもので、スポーツ史研究に多い。これらは主に、日本スポーツ界の国際大会への復帰や各スポーツの国内大会の再開など、日本の競技スポーツ・トップスポーツがいかに戦前の水準まで復興し、その過程で連合国軍最高司令官総司令部（General Headquarters, the Supreme Commander for the Allied Powers、以下 GHQ）や GHQ の部局である民間情報教育局（Civil Information and Educational Section、以下 CIE）が、用具や施設を提供するなどして、いかに復興に関与したかを明らかにした。

(2) 体育・スポーツの民主化・非軍事化研究：現代を論じる前段階としてプロログ的に占領期に言及するもので、スポーツ政策研究に多い。これらは主に、GHQ や CIE の指導の下、戦後日本の体育・スポーツの現場・組織などが政策的にいかに民主化・非軍事化されたかを明らかにした。

これらの研究は共通して以下2つの限界を抱えている。

(1) これまでは日本との関連性という文脈でしか駐留米軍を捉えておらず、駐留米軍内部で完結するスポーツ活動については明らかにしてこなかった。しかし、基地内の部隊対抗スポーツ大会のように一見日本とは無関係な活動が、それを観ていた日本人々が真似をしてそのスポーツを始めるなど、日本に影響を与えることもある。そのような影響を捉えるには、まず日本との関連性という文脈を脱し、駐留米軍の活動そのものを全体として明らかにする必要がある。

(2) これまでは日本代表選手や国内競技団体の役員、政治家、官僚など日本のスポーツ・体育・教育界の上層部・指導者層と、GHQ や CIE など駐留米軍の上層部・指導者層との関係にしか注目しておらず、日本各地に駐留した基地・部隊の個々の将兵と、基地周辺に住む日本人々との関係が等閑視されてきた。しかし、日本各地に駐留した基地・部隊でもスポーツを行っており、その活動が、日本においてトップレベルではスポーツを行っていない人々や、学校に通えず体育の授業を受けられないような人々のスポーツ活動に影響を与えた可能性もある。

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、占領期の日本本土における駐留米軍のスポーツ活動を、日本との関連性という文脈ではなく、活動そのものを全体として明らかにし、その活動が日本に与えた影響を、日本各地に駐留した基地・部隊の個々の将兵と、基地周辺に住む日本人々との関係レベルで検証することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 占領期の日本本土における駐留米軍のスポーツ活動の実態を明らかにすべく、米国国立公文書館新館（National Archives and Records Administration II、以下 NARA II；メリーランド州カレッジパーク市）において、同館のアーキビストの助言に基づき、史料を収集する。そこで得られた各基地・各部隊の月例・年次報告書等の記述の範囲で、いつ、どこで、どの基地・部隊がどれぐらいの規模・人数・頻度で、どのスポーツを、どのような目的で行ったか明らかにする。

(2) (1) で明らかにした駐留米軍のスポーツ活動が日本の特にアメリカンフットボールの活動に与えた影響を検証する。具体的には、占領開始前後での活動の主体・地域・目的などの変化の要因として、駐留米軍のアメリカンフットボールの活動がいかに影響したかを、(1) 同様、米国国立公文書館新館で収集した史料の記述の範囲で明らかにする。

アメリカンフットボールに着目するのは、本研究代表者がこれまで「戦前から戦後占領期の日本におけるアメリカンフットボールの受容過程」について研究を進める中で、駐留米軍のアメリカンフットボールの活動が日本のアメリカンフットボールの活動に影響を与えた可能性が非常に高いと思われたことから、駐留米軍のスポーツ活動による日本のスポーツ活動への影響を検証する際に、アメリカンフットボールが適切な事例であると判断したためである。

(3) 補助史料として、太平洋地域に駐留する米軍関係者向けの機関紙『星条旗新聞太平洋版』（Pacific Stars and Stripes）のスポーツ、特にアメリカンフットボールに関する記事も収集する。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の主な成果

占領期の日本本土における駐留米軍のスポーツ活動の実態を明らかにすべく、NARA IIにおいて、同館のアーキビストのEric Van Slander氏の助言に基づき、史料を収集した。具体的な史料調査の日程と調査対象となった史料群(Record Group、以下RG)は以下の通りである。

【調査日程】2017年8月7日～25日、2018年8月13日～31日、2019年8月12日～30日、2022年8月18日～26日

#### 【対象史料】

- ・RG 331: Records of Allied Occupational and Occupation Headquarters, World War II (第2次世界大戦連合軍占領司令部記録群)
- ・RG 338: Records of United States Army Commands (米国陸軍司令部記録群)
- ・RG 554: Records of the Far East Command, Supreme Commander for the Allied Powers, and United Nations Command (極東軍、連合軍総司令部並びに国連軍記録群)
- ・RG 407: Records of the Adjutant General's Office (高級副官部文書)

また、占領期(1945年8月15日～1952年4月28日)に日本本土(=東京)で発行された『星条旗新聞太平洋版』(Pacific Stars and Stripes)の記事の中から、アメリカンフットボール、フラッグフットボール、タッチフットボールに関する記事も収集した。具体的には Archive Service を利用して「football」という語で検索して該当した3014記事と「gridiron」という語で検索して該当した445記事である。

これらの史料から、主に以下の3点が明らかになった。

第1に、占領期の日本本土に駐留していた米軍は、非常に数多くのスポーツ(アメリカンフットボール、アーチェリー、バドミントン、野球、バスケットボール、ボーリング、ボクシング、クロスカントリー、ゴルフ、ハンドボール、蹄鉄投げ、海水浴、スケート、スキー、サッカー、ソフトボール、水泳、卓球、テニス、陸上、タッチフットボール、バレーボール、ウエイトリフティング等)を、米軍独自のスポーツ施設内のみならず、接収した日本のスポーツ施設などにおいても、様々な目的(競技、訓練、余暇、性病予防など)で行なっていたということである。

第2に、訓練や余暇、性病予防などを目的としたスポーツ活動であれば、部隊単位・基地内部で完結する活動が多くなる一方、競技を目的としたスポーツ活動については、現代の日本において、市区町村レベルの大会から始まり、勝ち進めば都道府県レベル→関東・関西などの地域レベル→全国レベル→世界レベルへと出場レベルが上がっていくように、当時の米軍においても、基地内部の大会に始まり、勝ち進めば最後は日本本土代表として沖縄や韓国・フィリピン・グアムに駐留する米軍のチームと対戦する国際試合まで、一連のトーナメント戦やリーグ戦が組み立てられ、国際米軍スポーツ界・国際米軍スポーツ体制とも言うべき体系だった制度・仕組み・世界が形成されていたということである。

第3に、このような多種多様で活発な駐留米軍のスポーツ活動は、日本に用具・施設・指導者等を提供するだけでなく、現地の人々が新たなスポーツを初めて体験・観戦する機会ももたらしたという点で、日本のスポーツ活動に影響を及ぼしたということである。

アメリカンフットボールを例に挙げれば、日本に用具・施設・指導者等を提供することで、戦前までの日本のアメリカンフットボールの活動を戦後すぐに復興させる一助となっただけでなく、駐留米軍が山形・新潟・富山・千葉・愛知・広島・熊本において管見の限り史上初めてアメリカンフットボールやタッチフットボールをプレイしたことで、現地の人々にとってその競技を初めて実際に見る機会を提供した。更に、大阪や富山では講習会などを開いて米軍が現地の高校生や小学校・中学校・高校の教員に直接アメリカンフットボールやタッチフットボールを伝えたことも明らかになった。

### (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究は、これまでのスポーツの人文社会科学研究における「占領期の欠落・駐留米軍の不在」という研究史上の大きな穴を埋める点で、先駆的かつ独自の位置づけにある。

また、本研究を契機に占領期という時代や駐留米軍という主体に注目が集まり、駐留米軍のスポーツ活動による日本への影響を種目ごとに検証する作業が進むことも期待できる。この意味で本研究は種目史研究においても有意義な先行研究になりうる。

加えて、従来の占領期研究におけるスポーツという分析対象の欠落を埋める点でも、本研究は先駆的かつ独自の位置づけにある。

更に、軍事史研究では、従来のように軍隊の組織や防備、戦略、戦術、兵器、戦史など軍隊のみに焦点を当てるのではなく、軍隊と社会・住民の関係を問う「広義の」軍事史といった新たな研究潮流が出始めており、その一分野として海外では軍隊スポーツ研究が盛んになりつつある。しかし、日本占領期の駐留米軍を対象とした研究は国内外問わず管見の限り皆無であり、その意味で本研究は軍事史研究においても「広義の」軍事史、特に軍隊スポーツ研究という分野の知見を深める点で有意義である。

### (3) 今後の展望など

本研究で調査できた史料は、NARA II に所蔵されている陸軍の文字史料(紙の史料)のみだが、本研究の目的を果たすには、海軍の史料や静止画・動画の史料についても調査することが望ましい。今後も少しずつ対象の範囲を広げて史料調査を継続し、駐留米軍のスポーツ活動の実態と、日本への影響を明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Takuya Kumazawa
2. 発表標題 The effects of US sports activities on Japanese sports: Insights into American football played by the U.S. forces during the allied occupation
3. 学会等名 The 2020 Yokohama Sport Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------